

## 万葉題詞のことば

—「夜裏」・「留女」考—

小 島 憲 之

—  
新春の事始め、清初の学者顧炎武の『日知録』を繙く。その巻二十一（黄汝成の「集釈本」による）の「詩題」の項に、

古人の詩、詩有りて後に題有り、今人の詩、題有りて後に詩有り。詩有りて後に題有るは、其の詩情に本づく、題有りて後に詩有るは、其の詩物に徇ふと。

（原文漢文）

とみえ、「詩」とその「題」の前後關係に二つの場合の存在することを述べる。また博文館「明治百科全書」（第十七編）『作詩自在』（明治二十九年刊）の中にも、

古人は詩を作るに意なくして詩自ら成りたるがために、題は多くは後より付けたるなり。（作詩纂話の項）

とみえる。両説ともに、「詩」と「題」（題詞）とは必ずしも同時の成立でないことを述べる。

これを『万葉集』に適用するならば、「歌」と「題詞」とは、同時の場合もあり、然らざる場合もあることになる。「歌」はその作歌時には、「題」を伴はないのがその当時の一般の傾向であつたと思はれる。尤も文学意識が高まり、これを他人に示さうとするとき、歌に対する長い題詞も生れて来よう。「作る」意識の強い大伴家持などになると、その殆んどが「題」を伴ひ——これは歌の「場」（景況）を示す——、それは本人の加へたものといへる。しかし柿本人麻呂などの、天平歌人にとつて伝説的な歌人ともなつてゐた者の歌になると、その題詞もまづ疑意を以て考へねばならぬ。編纂者もしくは人麻呂以後の某人の恣意による作題の場合も多く、歌も題詞と矛

盾するかにみられるふしもある。すでに万葉学者の指摘も少くない。

本稿で述べようとすることは、「歌」とその「題」即ち「題詞」や「左注」との矛盾、その成立前後関係などの考証的方面のことではない。一つの「題詞」がその歌の中の歌語とどのやうな関係に立つのか、むしろ「題詞」「左注」などの中の万葉語について、その「語性」のいくばくかを思ひつくまゝに考察しようとする。題詞中の「語」については、現代万葉学のうち今もなほおくられてゐるところ、ここに一得の愚を呈したい。

## 二

大伴家持の天平勝宝二年（七五〇）三月二日作の歌に、

夜ぐたちち寢覚めて居れば川瀬尋め心もしのに鳴く  
千鳥かも（四一四六）

夜ぐたちちて鳴く川千鳥うべしこそ昔の人もしひのひ来  
にけれ（四一四七）

がある。これは卷十九の冒頭に属する佳作群の中の歌であり、その題詞に、「夜裏聞千鳥喧歌二首」とみえる。この「夜裏」の語性果して如何。家持はこれに先立つ天平十九年（七四七）の作「述恋緒歌一首并短歌」（三九七八）三九八二の左注にも、

右三月廿日夜裏忽兮起恋情二作（卷十七）

とみえ、「夜裏」は彼のかなりよく使用した語といへよう。因みに右の歌群の題詞「恋緒」は和製語、左注「恋情」は漢語。それぞれの語の性格、語の出自を異にする。

題詞及び左注にみえるこの「夜裏」は、『佩文韻府』に、王建「短歌行」の、

百年三万六千朝、夜裏分将強半日。

の一例を挙げるのみ。王建は中唐の詩人、生没未詳。

『唐才子伝』（卷四）に、

工タケミツツクリ為ニ樂府歌行一、格幽思遠……建性耽酒、放浪

無拘。宮詞特妙三前古……談間故多知ニ禁掖事一。

作ニ宮詩百篇一。

とみえ、宮詞、樂府の詩を以て知られた詩人である。

『全唐詩』の伝にも、「宮詩百首、尤伝誦人口」（卷二九七）と述べる。王建は中唐大曆十年（七七五）の進士、但し一説には貞元（七八五〜八〇四）中期の進士とも云ふ——中華書房一九五九年刊『王建詩集』前言参照——。家持のこの作歌年代よりみて、王建の例とは無関係であり、むしろ王建のそれに先行する。しかし中唐の例のみえることは、少なくともこれに溯る唐詩に例のあることはまづ予想してよい。

その一つに、平安初期の詩人らのよく利用した唐殷璠撰『河嶽英靈集』（巻中）の中にも例がみられる。盛唐崔国輔の、

客行貪利涉、夜裏渡湘川（夜渡湘江）

は、その珍らしい一例である。また『全唐詩』（巻一一九）には、彼の「従軍行」の詩、

夜裏偷道行、將軍馬亦瘦。

も収める。唐人撰唐詩集である、総集『河嶽英靈集』は、盛唐玄宗の天宝十二載（七五三）ごろの撰と云ふ。この唐代詩集がかりに平安時代以前に伝来してゐたと仮定しても、家持の「夜裏」はこれに少し先行する。但し何らかの機会によつて、崔国輔自身の詩に出会ひ、これを学んだとみることは、かつがつ可能であらう。しかしこれはあまりにも窮屈すぎる。

右の崔国輔の「夜渡湘江」（明刊景印本）の詩は、北宋本『河嶽英靈集』（下巻）には、盛唐孟浩然（六八九〜七四〇）の詩としてみえ、『文苑英華』（巻二九一）にも孟浩然の作とする。但し「夜裏」を「闇裏」に作る本もあることを指摘、『全唐詩』、『孟浩然箋注』も同様。もし孟浩然の詩とすれば、伝来の機に乗じて、家持がこの「夜裏」の語を学んだとみることは、時代的にみれば、多少の可能性はあり得る。しかし「夜裏」と云ふ、唐詩

に於てもあまり使用されない語を家持が使用したことに  
ついては、やはり疑問がないでもない。

「夜裏」は、「一裏」系の語に属する。たとへば、六朝  
艶情詩集である『玉台新詠』を例にしてみても、

房裏 裳裏 心裏 帳裏 家裏 花裏 窓裏

など、何裏の例は二十数例にも及ぶ。また唐代小説『遊  
仙窟』にも、

内裏 房裏 園裏 箱裏 夢裏 心裏 手裏 腹裏  
頰裏 鼻裏

など、十数例をみる。このやうな何裏の例によつて、家持の「夜裏」の例も案出されたかも知れぬ。「夜裏」は、『金瓶梅詞話』（第八十六回）や、現代語（*read in*）にもみえ、俗語的な性格をもつ語であり、そのため古い文献にはあまり見えないといつても必ずしも誤ではなからう。

題詞に見える家持の「夜裏」は、歌の中の「夜ぐたち  
に」「夜ぐたちて」に相当し、夜の範圍内を示す夜のう  
ちに、の意。ここに何裏にまつはる語、「一のうちの」の  
意をもつ語の成立が考へられる。同じ巻十九の家持作  
「追和筑紫大宰之時春苑梅歌」（四一七四）にみえる、  
春裏の楽しき終へは梅の花たをり招きつつ遊ぶにあ  
るべし（天平勝宝二年三月二十日）

の「春裏」もその一例とみられる。漢語「何裏」の応用

と日本語「うち」との結合の結果、「春裏」と云ふ語が生れたとも云へよう。『日本古典文学全集』の頭注に、「春の遊びはさまざまあるが、その中の、の意か」とみえるが、「春の内」の、意とみるべきであらう。なほ「春裏」は、盛唐詩以前に例がなかなか見あたらない。家持の「春裏」は恐らく造語であり、文字表現よりみれば、何裏の応用といえよう。因みにこの歌の題詞中の「春苑」は、唐代詩語とみるべきであり、これに対する「春園」は六朝詩に多い語である。詳しくは、拙稿「漢語享受の問題に關して——『万葉語』の場合——」（高野山大学「国語国文」第三号）参照。

「何裏」系語の中に、さらに家持の「内裏」もある。それは、「十二日（天平勝宝五年正月）侍於内裏聞千鳥喧歌」の題詞をもつ歌であり、

川渚にも雪は降れれし宮裏に千鳥なくらしむ処無  
み（四二八八）

とみえる。題詞「内裏」は歌語「宮裏」に同じ。この語は、何裏の語に属しながら一般にかなり多くみられる。

「内裏」は、『遊仙窟』に、

忽聞内裏調箏之声（醍醐寺本・真福寺本「ウチツカタ」、陽明文庫本「ウチカタ」）

とみえ、もとは家のうちの意。内裏即ち宮中の意は、そ

の特殊な場合であり、ここはそれである。この「内裏」の意味する「宮裏」の例は、『玉台新詠』の梁簡文帝の詩、

殿上図神女、宮裏出佳人（卷七、詠美人觀画）

にもみえる。「宮裡」に作る文化三年の和刻本もある。家持の歌の「宮裏」はこれに同じく、宮中の意。この「宮裏」に同じ意味をもつ「題詞」の「内裏」は、前述の如く、すでに特殊的に固定化した例であり、『遊仙窟』の例とは意を異にする。

なほこの何裏の一群かと思はれるものに、大伴書持（流布本「家持」）の、「追和大宰之時梅花新歌六首」中の第五首、天平十二年十一月九日作の、

遊内の樂しき庭に梅柳をかざしてば思ひなみかも  
（三九〇五）

がある。この「遊内」については、諸注一定しない。

『古典文学大系』は、「遊ぶ現（現在）」と解する。もし「遊内」を「遊裏」とみなすならば、これも漢語の俗語系の「某裏」とこれを訓読化した歌語とによつて誕生した新造語ではなかったか。ここにつたない一案を提出する。

同じことを再び繰り返すならば、歌意と比較して、「夜裏」は夜のうち、夜のうちに、の意。この語の出自

を、唐人孟浩然や崔国輔の用例などとみなすことは、やはり苦しい。何裏の例は六朝以来甚だ多く、しかもむしろ俗語的方向をもつ語である。このやうな語性と日本語の「―のうち」と合はせて家持が造語したのかも知れない。尤も、上代詩を集めた『懷風藻』にも「何裏」の例十数例をみるが、その殆んどが漢語に未見。「園裏」(文武天皇、詠雪)のみが『遊仙窟』のそれに一致する。やはりこれは上代人一般の造語法の一つとみられ、家持もその方法に学んだとみるべきであらう。もしさうとすれば、「夜裏」は漢語(中国語)と日本語との混合によるものである。語性、語の出自の指摘は甚だむづかしい。

### 三

題詞、左注などのうち、「留女」も、私には気にかかる語である。それは、卷十九の「從<sub>三</sub>京師贈來歌」に、  
山吹の花取り持ちてつれもなく離れにし妹をしのひ  
つるかも(四一八四)

とみえ、その左注に「右四月五日(天平勝宝二年)、從<sub>三</sub>留女之女郎<sub>二</sub>所送也」と云ふ。また家持が妻に代つて贈る歌二首(四一九七・四一九八)の左注にも、「右為<sub>三</sub>贈<sub>二</sub>留女之女郎<sub>一</sub>所詠<sub>三</sub>家婦<sub>一</sub>作也。女郎者即大伴家持之妹」とみえる。「留女」が誰であるかは別として―誰を当て

るべきか、詳しくは、山本健吉氏『詩の自覚の歴史―遠き世の歌人たち―』(第十七・十八章)参照―、「留女」自身の語性が気になる。卷四(五〇〇)の題詞「葦檀越往<sub>三</sub>伊勢国<sub>二</sub>時、留妻作歌一首」の「留妻」(家に留る妻、留守居の妻)より推して、「留女」は家に留る女人の意とみるべきであらう。しかし「留女」は和製語か否か、多少考慮すべき語である。この聯語についての諸説は、ともかくとして、本誌(第三十五号)所載、川口常孝氏の『京の丹比の家考』の見解は新鮮である。それによれば、『文選』(二十五)謝惠連「西陵遇<sub>三</sub>風猷<sub>二</sub>康樂<sub>一</sub>」の其二の詩、

懷懷留子言(懷々たる留子が言)、眷眷浮客心(第五・六句)

の「留子」によって、家持が「留女」の語を新造したものと云ふ。前の句は、あとに「留まる君」は悲しい別離の言葉を述べる、の意、「留」は留まり残る意である。六臣注は当時まだ伝来してはぬないが、試みにこれを慶安版本によつて示せば、「留子ハ靈運(ノ)住(ヲ)謂フナリ」とみえる。「住」は留まる意。川口説は恐らく妥当であり、納得のゆく見解である。

なほ多少参考となるべきものをあげると、万葉人の云ふ「手師」(王羲之の書翰類、即ち法帖の中に「留女帖」

(宋人岳珂『宝真齋法書贊』卷七所収)がある。

吾去日欲留女過吾去、自当送之、想可垂許  
出一、未知還期…。

この「留女帖」は、句読点など私にとつて甚だむつかしい。これは『漢魏六朝百三名家集』に「夫人帖」としてみえ、右の試みとは句読点、つまり「よみ」も大分違ふ。しばらく自信のない試案による。これは、「先日來、娘を引き留めて私のところにたちよらせたいと思つてゐます。出発の時には私自身で送つてゆくつもりです。おゆるし下さるでせう。その還る期日はまだわかりませんが…。」といった意であらう。「一出」をどの句につけるか、ひろく看官の御教示を待つ。この「留女」は女を留める意。しかもこれは自他何れにも換はる語であり、やがて「留まる女」の意にも転ずる。家持の左注「留女」はこの意として使用したものであらう。ここで私は、「留女」を王羲之の「留女帖」によるものと断ずるわけではない。しかしこの語の背景には多少の漢語の影が存在し、単なる「留まる女」といふ日本語そのものと云へないふしがある。

『万葉集』、その歌は勿論のこと、「集」の中にも見える表記はすべて万葉集裏にある。題詞や左注の語も無視すべきではない。特にこれらの中には漢語の表記が多く、

家持などは歌に対して、なるべく漢文的に題詞・左注を書かうと意識する。たとへば、家持の題詞中の「晚蟬」(二四七九)は、歌中の「日晚」に同じ。この「晚蟬」は漢語なるか、和製語なるか、これも題詞をめぐる問題の一つとはならう。拙稿「語の性格―万葉語『晚蟬』の場合―」(『美夫君志』第二十三号)参照。しかもこのたぐひの問題は、『万葉集』全体に及ぶことを要し、今後残された部分と云へよう。

(あとがき) この稿は、昭和五十四年五月仙台に於ける上代文学会大会第一日に口頭発表すべき一部であつたが、当日つまらぬ私の長い前置きのため、言ここに及ばず、初めて起稿するものである。